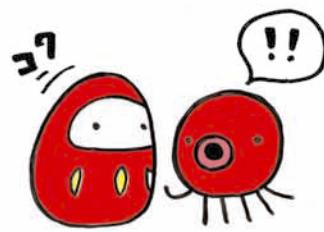
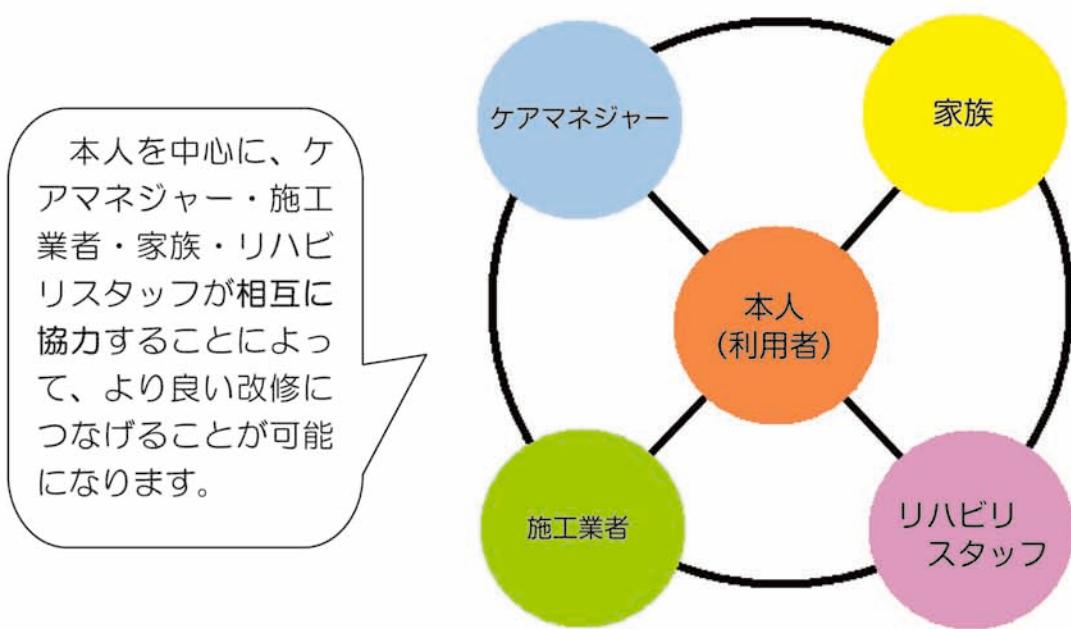


2

訪問・話し合い



ケアマネジャーの元に、本人や家族から「家が使いにくくなつた」、「身体の状態が悪くなつた」等の相談が寄せられ、住宅改修の手続きが開始されます。ケアマネジャーは、相談が寄せられると住宅改修に関する情報を集める必要があります。病院を訪問したり、本人や家族のもとを訪問する等して情報を集めます。その後、ケアマネジャーもしくは本人、家族、施工業者、リハビリスタッフがチームとなり、家庭を訪問し本人に実際に動いてもらう事によって、より使いやすい環境を考えていきます。また、病院等を退院して自宅に帰ってくる場合は、退院前に家庭訪問をすることが望ましいです。本人や家族の意見を確認し、それぞれの職種がお互いに意見を出し合い、ケアマネジャーはそれぞれの意見をまとめる役目を担います。



住宅改修に関わる人の役割・働き

本人

高齢になるにつれ、下肢の筋力が低下し、ふらつきやすくなったり、転倒しやすくなってしまいます。それに伴い、以前に比べ思うような生活ができなくなることがあります。また「本当は続けたいが、できないと諦めていること」があるかもしれません。それらの「できなくなつたこと」や「これからも続けたいこと」等をケアマネジャーもしくはリハビリスタッフに伝えることが大切です。

家族

本人と同じ家に住んでいる場合、同居家族の意見も大切です。共用のお風呂やトイレ等の改修を行う場合、家族の生活の妨げにならないようにする必要があります。住宅改修の目的には家族の介助負担の軽減も含まれているので、本人に望むことや、家族が本人にどのような生活を送ってほしいのか、家族が行える介助内容をケアマネジャーに伝えることが大切です。

ケアマネジャー

介護支援専門員。本人や家族に代わって、要介護認定の申請や、サービスの種類や内容等を定めた、ケアプランを作成する等のケアマネジメントを行います。また、要支援者、要介護者や家族に対して提供されるサービスが適切であるか、それぞれの職種が適切に運営されているかどうかの連絡・調整を行います。ケアマネジャーは、介護保険の制度等に対する専門知識を持ち、住宅改修がスムーズに行われるよう取り組む必要があります。

施工業者

住宅改修において工事を行います。柱の位置等の、家の構造を建築的に考え、工法や工期を判断します。また、事前写真や事後写真を撮ったり、事前に見積もりを出し、本人や家族に了承を得る必要があります。

リハビリスタッフ

作業療法士（OT）：人ー作業ー環境という3つの側面から、その人の望む生活を妨げる要因を分析し解決策を提案します。それは日常生活だけでなく、本人の趣味の領域も含みます。本人や家族は本人が「できなくなったこと」や「これからも続けたいこと」等に対して諦めていることもあるので、思いを傾聴し、住宅改修や福祉用具によって改善できないかを検討することが大切です。必要に応じて手すりの位置などを示した簡単な図面を作成しケアマネジャーに渡します。

理学療法士（PT）：立ち上がり、歩行や移動等の動作を詳しく観察し、基本的動作の能力を評価します。その情報をもとに手すりや踏み台の高さなどについて検討し、自立を促す住宅改修になるよう意見を述べることが大切です。必要に応じて、自宅や病院などでシミュレーションを行い動作能力を確認し、作業療法士やケアマネジャー等と協議します。また、身体機能の側面から今後の必要となる住宅改修についての意見を述べることも大切です。

住宅改修方法の決定までのプロセス

本人・家族、ケアマネジャー、施工業者、リハビリテーションスタッフとの話し合いの中で、本人・家族の意見を尊重しながら改修方法を決定します。その際、住宅改修以外の様々な解決策も検討する必要があり、まずは以下のように考えていくことが大切です。どのような場合も、安全性を第一に考えながら、家族の支障にならないように、簡易に設置できるものを選ぶほうが望ましいです。以下に改修までに至るプロセスを述べます。

- ① まず、ベッドや家具の配置換え・支障となる物を取り除く
↓
- ② 次に、自助具や福祉用具の使用を考える
↓
- ③ 最後に、手すりの取り付けや段差解消等の住宅改修

決定を行う際、ケアマネジャーは支給限度額が20万円であるということや、改修箇所が、内容に合っているかを家族・本人と再度確認したうえで、住宅改修の内容を最終確認しましょう。

以下のことが改修の際に考慮されているかチェックしましょう。

チェック欄

- 本人や家族の意見を反映しているか
- 本人の自立を促しているか
- 介助負担を軽減しているか
- 過度な改修になっていないか
- 経済状況について考えられているか

